

## 一九五〇年代「原爆の凶展」と炭鉱文化運動

岡村 幸宣

### はじめに

二〇一八年七月二八日の原爆文学研究会において、ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶—文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える—」が行われた。

司会の楠田剛士氏は、議論の冒頭で、「炭鉱」と「原爆」をつなくキーワードとして、朝鮮人徴用工や朝鮮戦争特需、先住民、近代化の遺構という四つのテーマを提示した。いずれも、日本国内の視点で語られがちな「炭鉱」と「原爆」を、周辺諸国も含めた問題として俯瞰するという点で、今日、重要な意味をもつテーマである。

筆者は、二〇一五年に刊行した『《原爆の凶》全国巡回—占領下、一〇〇万人が観た！』（新宿書房）において、一九五〇年代前半に行われた《原爆の凶》全国巡回展の動向を調査したが、その際、とりわけ北海道と九州において、炭鉱で「原爆の凶展」が

数多く開催されていたことが気にかかっていた。とはいえ、まさに朝鮮戦争下であったはずの当時においても、楠田氏の提示した問題意識が、どれだけ当事者たちに共有されていたのかはわからない。現存する展覧会資料からは、必ずしも見いだせないのではないかという印象を持っていた。

今回、ワークショップにあたり、あらためて資料を読み返したものの、やはりその印象は変わらなかった。あるいは限られた資料から可視化できないだけで、炭鉱における「原爆の凶展」の意味を、鋭く批判的に読み解いていた者もいたかもしれない。私たちに必要なのは、可視化されたものの先にある、いまだ形になりにきれない思考の痕跡を読み解く想像力なのかもしれない。

ともあれ、本稿では、「炭鉱」と「原爆」をつなぐ問題意識が見えきれない時代において、何が語られたか（語られなかったか）という事例を、展覧会感想文を中心に報告し、今後の調査につなげていきたい。

## 《原爆の図》全国巡回のはじまりと九州の炭鉱

《原爆の図》は一九五〇年二月八日から一八日に東京都美術館で開催された「第三回日本アンデパンダン展」に第一部（八月六日）、のちの《幽霊》が発表され、半年後の八月に、やはり東京の日本橋丸善画廊（八月七日から一三日）と銀座三越（八月一五日から二〇日）で三部作完成記念展が開催された。米ソの核開発競争が本格化しつつあり、三月にはストックホルム・アピール、六月には朝鮮戦争勃発という具合に、核をめぐる世界情勢が緊迫する時期と《原爆の図》の成立は重なっている。

広島では八月六日に開催予定であった「平和祭」が中止を余儀なくされるなど、占領軍は厳しい統制をしていたはずなのだが、丸木夫妻は八月一八日に、連合国軍総司令部に近い有楽町の日本交通協会で三部作完成の記念集会を行い、そこで全国巡回が「決議」されたと言われる。きっかけとなったのは、九州からの展示の依頼だったようだ。この依頼については詳しいことがわかっていないが、今堀誠二文書「丸木・赤松『原爆の図』についての調査メモ」<sup>(1)</sup>には、受け入れ責任者として、福岡在住で平和を守る会（平和擁護日本委員会）の寺坂正三の名が記されている。

丸木夫妻は九月に位里の郷里の広島へ行き、加計町に住む弟の小田宜三が《原爆の図》を掛軸に表装した後、一〇月五日から九日に広島市内の原爆ドーム南隣にあった五流荘（爆心地文化会館）で展覧会を開催した。その後、《原爆の図》を携えて九州へ渡り、一〇月一九日にまず福岡県の志免炭鉱で九州最初の展覧会を行った。会場は、一九四九年五月に落成した新庁舎。主催は国鉄労組

志免支部と青年婦人部平和実行委員会、後援は国鉄労働組合志免支部文化部美術サークルと旭映画劇場だった。志免炭鉱は戦前に海軍によって開設され、戦後に運輸省に移管されているので、正式名称は日本国有鉄道志免炭業所という。つまり、炭鉱の直轄組織の労働組合が中心となって主催した展覧会ということになる。観客たちがどのように《原爆の図》を観たのか、資料がまったく見つかっていないのは残念だが、「原爆の図展」のはじまりに、炭鉱がかかわっていたことは記憶したい<sup>(2)</sup>。

## 北海道巡回展と炭鉱

「原爆の図」展についてのニュースや感想文がまとめられているのは、一九五一年七月に京都・丸物百貨店で開催された「総合原爆展」以後のことだ。京都大学同学会の主催で、各学部の学生たちの専門的な視点から原爆を解説した展示は評判を呼び、その後各地で同様の「総合原爆展」が開かれていく。その中でも詳しい資料が残っているのは、一九五一年から五二年にかけて二度にわたって開催された北海道巡回展だった。

第一次巡回展は道学連が道内各団体に連絡し、室蘭、旭川、秩父別、札幌、函館の順に五会場をまわった。札幌展では北海道大文学堂中央委員会が中心となって展覧会を運営し、その様子は『民科ニュース』や『北海道大学新聞』などで詳細に報じられていく。一九五一年一月二〇日の『北海道大学新聞』には、一面トップに「生き残った人々の願い 総合原爆展」との見出しで報じられ、記事の下の方には鑑賞者の感想も記されている。

労働者 三六歳 男

多くの犠牲者を出したことは不幸である。しかし一度原子爆弾に対する認識をえたのであるから日本人として世界の人々にその使用に強く発言する必要があると思う。

女子事務員 二九歳

戦争を終結させるためにしかたがなかったことだと思ふ。それによって日本が世界平和および民主主義にめざめたことは日本にとってプラスになったと思う。

洋裁学院生徒 二三歳

戦争罪悪視にたいして目覚めさせる方法がこれ以外になかったとしても一人でも犠牲者が出た事は、やはり使用者に対して憎しみを覚えます。目的はどうあろうとも手段は絶対罪悪です。あらゆる人を悪人にさせ、大きな罪悪を産む戦争を徹底的に憎みます。

中学生 十五歳 男

戦争すると原爆などをつかいたくなるから戦争が起らないようにして下さい。原爆のおそろしい力を理解し皆が協力し合つて平和な世界にしてほしいと思います。

小学生 十一歳

原爆で死んだ人のことを思うと私達はとてもしあわせだと

思います。原爆なんかどうして作らなければならなかったのでしょうか。

主婦 二八歳

二度と人間を殺すために使つてほしくないと思つた。あの力を平和産業のために利用したらどんなにかすばらしい仕事ができ、生活が豊かになるだろうと思う。

《原爆の凶》についての感想は見当たらないが、展覧会は絵画展ではなく総合展だったから、編者が総合展にふさわしい感想を選択した可能性もある。ともあれ、この頃から展覧会の感想を事後に振り返りまとめていく資料があらわれはじめる。

札幌展では会場責任者が占領目的阻害行為処罰令違反容疑で逮捕されたという事件も起きたが、巡回展は盛況で、北大の若手研究者や学生たちは、一九五二年のはじめから全道で巡回展を行いたいという計画を立ち上げた。そしてわずか四カ月間に三二カ所で開催するという大規模な巡回展が実現する。

美唄市の郷土史研究者である白戸仁康氏の推測によれば、呼びかけルートのひとつは一九五〇年に結成された全北海道労働組合協議会（全道労協）と民主主義科学者協会（民科）であったという。そして、全道労協の中心となつてきた強力な労働組合のひとつが、日本炭鉱労働組合（炭労）だった<sup>(3)</sup>。

## 民科主導による夕張展

第二次巡回展は、北海道を代表する産炭地である夕張からはじまった。北大理学部地質鉱物学科の若手研究者だった松井癒の先導と思われる。彼は一九四五年三月から半年間、夕張の北炭地質学調査所で実習を行ったという縁があり、民主主義科学者協会(民科)が発足すると、民科札幌支部に地学団体研究部を結成するなど精力的に活動していた。

一九五二年一月一〇日、夕張原爆展初日に民科夕張支部より発行された『民科ニュース』第一号は原爆展特集号で、民科会長の末川博による「民科夕張支部発会に寄せて」という文が掲載されている。つまり、原爆展と民科夕張支部の発会は同時だったと考えられ、いずれも松井が主導的役割を担ったのだろう。これらの資料はすべて松井自身が保存し、後に北海道立図書館に一括で寄贈されたために「松井癒資料」として現存している。

<p><b>原爆展</b> (1952年1月10日)</p> <p>原爆展は、原爆の被害状況を明らかにし、平和の重要性を訴えるための催しである。民科夕張支部は、この展覧会を通じて、市民の意識を高め、平和運動を推進することを目的とした。</p>
---

土工 十七才 男

なんてむぎんな姿だろう。なんてあわれな姿だろう。ことばもなく、ただいたいたしい。しかし又あの恐ろしい戦争がまきおきようとしている。そしてまた、おそろしい原爆が使用される云々と言われている。血ある人よ叫ぼう。再軍備反対！平和を維持するのだ。再軍備反対こそ、原爆をなくする根本だ。

坑内夫 二五才 男

今迄の話や、見た絵の中で如何に戦争が惨ぎやく性をもつたものが身にしみる。十部作に全力をつくして下さい、平和を守るために。

坑内夫 二八才 男

何よりも戦争反対を叫びます。それには全面講和が必要です。そして吉田反動内閣の退陣。占領軍の即時てつたい。合せて日米安全保しよう条約に反対します。

坑内夫 二十才 男

二十世紀の悲劇とはいえ、今始めて目のあたり見、原爆の下にくり広げられたひさんは事実を見て今更に戦争の恐ろしさと、無意味さにあきれる。自分は坑内夫だが、炭坑夫にも人間としての魂はある。我々はこのような悲げきを二度とくりかえしたくない。

助産婦 女

こういう悲しみを二度とくりかえさぬ様に私たちは世界的な運動をおこさねばならない。

「土工」や「坑内夫」といった炭鉱らしい職業が目をはくが、原爆展の感想そのものは、それほど特色のあるものではない。「自分は坑内夫だが、炭坑夫にも人間としての魂はある」という感想には、被抑圧者としての共感が伝わるものの、「炭鉱」と「原爆」を結びつけ、本質を可視化させる視点とまでは言えない。

また、同じ紙面に、「原子力の平和的応用」という見出しの記事が掲載されていることにも注目したい。執筆者は記載されていないが、おそらく北大の研究者だろう。

科学者達は原子内の世界の研究にここ十数年ぼつ頭した。

そして原子がどの様な構造を持ちどの様に結びつき合っているか分つて来た。その力は莫大なものであるがその結びつきがこわれるときには莫大なエネルギーを出す。これを応用するとすばらしいことになるけれども、一度にエネルギーを生かさせると危険どころか原子爆弾となり一度に数十万の人間を殺りくする。だから小出しに少しづつエネルギーを発生させて用う。その方法はすでに研究されていて今実用になっているのが原子炉（アトミックパイル）と言われている。

これは原子爆弾の連鎖反応の速さをおそくしたもので、ウラニウムの適当量を入れてやれば自然に動く。ここで発生し

た熱で水を水蒸気にしてタービンを動かせば発動所が作られる。ウラニウム一キロで一千万キロワット時と言われる。アメリカではすでに一九四四年にこの原子炉を作っている。これを動力に使えば現在の工場はいつも暖かく、煙や灰一つでないものになる。虫メガネでやっと思えるウラニウムが貨車四台分に相当することをよく考えてほしい。汽車も船もこれを燃料とすれば素晴らしいことになる。(これは現在未完成で研究中である)さらに原子炉からは色々の元素の同位元素がつくられる。これはラジウムと同じ様に放射線を出すので、これを使って医学的・生物学的にいろいろ興味ある研究が出来る。例えば食物にまぜてのますとそれがどこへ行ったか、放射線を出してくれるからすぐ分る。

又ラジウムの代りに治療に使ったり、工業的に応用したりする。

やや素朴とも思えるが、当時の科学的知見から未来のエネルギーへの期待が語られている。「夢のエネルギー」が誕生したら、炭坑はどうなるのか。坑夫たちの仕事はあるのか、という切実な問題も浮上するはずだが、こうしたエネルギー問題の視点から、「炭鉱」と「原爆(核)」を当時どのように結びつけて考えられたかが伝わる炭鉱関係者の感想は見当たらない。

日本でも戦前から原子力研究は行われていたし、戦後、一九五三年一月の有名なアイゼンハワー米大統領の国連演説「Atoms For Peace (平和のための原子力)」以前から、「原子力の平和的応用」の言説は広がっていた。「原爆の図」巡回展においても、別の会

場ではあるが、CIAの教育映画『Atomic Power』が上映されたという記録がある。当時、原爆の惨禍を伝える展示とセットで「平和的応用」の夢が語られることは、決して珍しくはなかった。

### 炭鉱労組主導による三菱美唄展

夕張が民科主導の代表例であれば、炭鉱労組主導の代表例は三菱美唄炭鉱の総合原爆展だった。当時、道内の労働組合で唯一自前の組合本部を持っていた三菱美唄炭鉱労組は、その本部の建物の新築記念事業として、総合原爆展を企画した。一九五二年一月二十七日、二十八日の二日間、三菱美唄炭鉱労組本部二階の大会議室で開催された展覧会には、「全山小中学生」が参観し、二日間で約一万人が来場したと記録されている<sup>(4)</sup>。

全国的に文化サークル活動が盛んだった当時においても、三菱美唄炭鉱労組の活動はとりわけ熱心だった。この原爆展の際にも、三菱美唄炭鉱文学会の機関誌『炭炎』第五巻第八号(一九五二年九月発行)に、「原爆展をみて 感想文集」という特集が組まれ、小学生から大人まで九人の感想が掲載されている。

沼小五年 星川英行

僕達は今日宮の下へ原爆展を見にいった。これは親しい人達を原爆で失った絵の展らん会である。第一部は「ゆうれい」第二部は「火」第三部は「水」という絵の中からなり立って居る。第一部の「ゆうれい」は一発の原爆のために一しゅんの内に地ごくの町と変った廣島の町を、苦しみつつまよって

歩く人々の「たましい」をかけた物で、そのすごいこと僕は何とも言えなくなつた。

二部の「火」は、もえる火の町を体中やけこがされた人々の苦しい有様で、三部の「水」の処では、この人達が水を求めて子供達をさがしたり、親をたづねたりし死のすぐ前を苦しむ有様で、三部とも本当にすごいみじめな有様であつた。

ぼくはもう始めの絵の説明から「ああいやだ」「戦争はいやだ」と心の中でさげんだ。

僕も東京からそかいした。いなかで空しゆうに合い、お母さんにつれられて食物や水を持って防空ごうににげたりしたこともあるが、こんな有様は生れて始めてである。

どうして大人の人達は戦争なんか始めたんだらう。どうしてこんなおそろしい原子爆だんなか落されるまで戦争をやめなかつたんだらう。

僕は大人がにくらしくなる、僕は戦争がきらいだ。僕達が大きくなつて、僕達の世の中になつたら平和な世界をつくる人間にならうと固く心に思った。こんなおそろしい原子爆だんを人間がつくつたんだ。

それだけの大きな力を僕らの時代になつたら全世界の友達と話し合つて世界の平和のために使つたらどんなに良い世の中になるだらうと思つた。

戦争はぜつ対いやだ。

旭校三年松 工藤健三

なん百人しんで、かわいい、ひとがしんでいた

もうせんそうは、しないほうがいいです。

旭校三年松 酒井英紀

なんびやく人も、しんで、もうこりごりです

旭校三年松 畑清彦

なん百にんもしんで、かわいそです。昭和二十七年からせんそうをしないで、へいはな日本にしたいと思ひます。

旭校六年松 高田義和

僕は、この原爆展を見たしゆんかん今まで考えてもみなかつたことが思ひだされた。

化学が進歩していろいろなものが發明されたりかいらりようされたりして、今まではむかしに考えてもみなかつたほど發展しているが、しかしこの人類のために作つたものも悪用すればおそろしいものになる原子爆弾などもそうである。しかし、それらのものを發明した人は、なにもそんなおそろしいことにつかうために作つたのではないだらうと思う、そんなことを考えながら最後の三部作（水）の所を見た。そうして説明を聞いていると説明をしている人がある廣島にいたおばあさんが「ピカドーン（原爆）はがけくずれとちがつて人が落さなければ落てこない」といつたと説明の人がいつて最後にこのおばあさんのいつたことを聞いてなにか考えさせられたことがありませんかといつた。

その時僕はまた考えた、なるほど、このおばあさんのいつ

たことにまちがいが無いと思つた。それはがけくずれなどは人間の力でとめられないがせんそうは人間がしたのですから人間の力でとめることが出来るだろうとそんなことを考えながら廊下本部を出た。

その時もうあんなせんそうは二度としたくないと思つた。

「せんそうぜつたい反対」

(終り)

#### 一 事務員

人々の脳裏からようやく消え去ろうとしている戦争の惨禍に対する記憶を新にする意味で、更に再びかかる非人道的な武器を使用することのないよう世人の認識を高める意味において実に意義深い催しであると思う。

かくいう私も、二十年三月の東京の大空襲に遭つて命からがら逃げのびた一人であつて悪夢の一夜が過ぎて眼に入るものは只灰となつた家と、夥しい焼死体だけで余燼はなお空を蔽い、焼死んだ人の死体の臭気はあたりに満ちて誠に惨たる有様であつた。

一步大通りに出れば屍累々として、川筋に出れば火災に追れて前後の見境なく飛び込み溺死した人々……。さらに四辻には焼死体の処置に窮して、あたり魚か何かの如く釣で引掛け積上げ、トラックで運ぶのを待つている。そのそばでは炊出しを受けた人々が、うつろな眼で何の感動もなく握り飯を頬張りながら眺めている。

死体の中には生れてまもない赤ん坊の腹を破られたのがあ

り母親らしい女の手の中に抱かれたまま息絶えたのがあつたりして、今にして思えば到底見るに忍びない惨状であつた。今の展中”水”に描かれている死体を積上げた場面はまたまだ綺麗過ぎる感じした。

普通の焼夷弾でさえ実に惨たんたる修羅場と化したことを知っている私にとつてはあの原爆の災いを蒙つた廣島の惨状は全然計り知ることの出来ないものがある。

過日朝鮮戦線で原爆使用云々が論議され、又最近の某雑誌に載つた米国誌の翻訳記事の”第三次世界大戦”の想像記事を見たり聞いたりして実に慄然たるものがあるいかにしても、この全人類、否全地球を破壊に陥入れるような武器の使用を阻止しなければならぬ。

原爆の平和的利用大いに結構、一日も早く実現して全人類の幸福をもたらすことに努力しなければならぬ。

一九五二、一、二七

#### 一 主婦

原爆は人間が作つたものであるなら、私達人間が落さずにすむものでしょう。

此の様なみじめな有様を見た時に平和のために闘うものは私達主婦であり、人民であると思ひます。可愛い我が子のために戦争に反対致します、世界の人類のためあすからでも闘わなければならぬと存じます。

とりとめない言葉ですが思ひのままに書いて見ました。

一主婦

この度の原爆展は労組の催と致しましてはほんとうに大きな収かくでございました。

戦争の惨めさを知らない山狭の炭坑人が再び戦争が起ろうとしている現実の政治への感かくさえも失っている炭坑の若人の時代の世紀を背負って立ち上がらなければならぬ人々に大きなしさをあたえていること信じます。

常盤台 一青年

わたくしはこのような現実にはぶつかりませんでした。が絵の、もっているリアルなものから、だ、一、つばいの感動を受けました。

説明者の分りやすい言葉使いも、それはこの催しものに対応するまごころからでたものだと思います。

ピカドンのおばあさんの言葉（がけくずれとは違ってピカドンは人が落すものだ……）は、わたしの之からの大きな、よりよく生きるための指針になりました。

この絵をお書きになった方は、ほんとうに人民の為に働いている方だと思いますが、もつと他の絵なども見せて貰いたいと心から御願ひ申します。

札幌や夕張と比べて、絵についての感想が多く選ばれているのは、編者の関心のせいだろうか。三菱美唄炭鉱労組では美術サークルの活動が盛んであり、一九五〇年にはサークル会員による集団制作で《人民裁判事件記録画》も制作している。

「戦争反対」との感想が繰り返し掲載されているのは、生々しい戦争体験を通して培われた率直な心情なのだろう。自身の東京大空襲の体験を重ねながら《原爆の図》を見る感想があることも興味深い。筆者が一九五〇年代の「原爆の図展」の聞き取り調査を行っていた際にも、満州からの引き揚げ体験を《原爆の図》に重ねながら見たと証言する人がいた。個々の体験と目の前の絵が結びつき、非体験の記憶が立ち上がる。こうした現象は、炭鉱に限らず、当時各地の会場で見られたことだろう。

第二次巡回展の会場は、栗沢町（美流渡炭鉱労働組合本部集會室）、三笠町（幌内炭鉱労働組合本部大会議室）、上砂川町（砂川炭鉱労働組合本部二階大会議室）、赤平町（赤間炭鉱労働組合本部講堂）、赤平町（赤平炭鉱労働組合本部大会議室）、沼田町（浅野雨龍炭鉱労働組合本部会議室）、留萌市（大和田炭鉱大和田会館講堂）といった具合に、約三分の一が炭鉱で開催されている。

とはいえ、その理由は、巡回展を担った関係者の証言によれば、「炭鉱町には長屋が多く、一カ所に大勢の人が住んでいるので宣伝の効果が良かった。組合活動も活発で、どうしてこんなに集まるのかというほど来場者があった」というもので、高額であった展覧会の負担金も組合が「安いものじゃないか」とすぐに承諾して宿舍や食事も手配してくれたというから、必ずしも「炭鉱」と「原爆」をつなぐ問題意識の表れというわけではなかったようだ。

### 炭鉱と「原爆の図展」のその後

一九五二年一〇月から翌五三年一〇月にかけて、《原爆の図》

は九州を中心とした西日本を再び巡回する。その際、福岡県の直方市や大牟田市、長崎県の潜龍炭鉱、崎戸町などもまわっており、潜龍では一万九〇〇〇人が来場したという記録もある<sup>5)</sup>。

北海道の炭鉱での展覧会の盛況を考えれば、九州の炭鉱でも大規模な観客動員があったことも決して不思議ではないが、この時期の観客の感想文等の資料はほとんど残されていない。

一九七二年になると、丸木夫妻は、石牟礼道子の発表した文章「菊とナガサキ―被爆朝鮮人の遺骨は黙したまま―」<sup>6)</sup>に想を得て、朝鮮人徴用工の被爆死を主題にした原爆の図第一―四部《からす》を発表するが、朝鮮人に象徴されるような原爆に内在する戦争の「加害性」に気づいていくのは、一九七〇年代以後、ヴェトナム反戦運動を機に、日本のアジアにおける戦争責任を捉え直すという社会的機運が高まる時代まで待たなくてはならない。

では、一九五〇年代における「原爆」と「炭鉱」の文脈には、アジアに対する責任への視点は存在しなかったのだろうか。ワークシヨップの質疑では、そんな問いも投げかけられた。

「炭鉱」ではないが、一九五五年五月には、亜鉛や銅を採掘していた花岡鉱山のあった秋田県大館市で「原爆の図展」が開催されている。花岡鉱山は、戦争末期の一九四五年六月三日に、過酷な労働に耐えきれず中国人労働者約八〇〇人が蜂起し、日本人補導員らを殺害、その後鎮圧されるという事件（花岡事件）が起きている。展覧会の主催は大館市原水爆禁止期成同盟、共催は大館市中央公民館、後援は大館市・大館市教育委員会、会場は桂城小学校講堂であったと新聞広告に記されている<sup>7)</sup>。

当時、原爆と花岡事件をつなぐ想像力はあったのだろうか。つ

なぐとしたら、それはどんな想像力だったのだろうか。その問題意識を伝える資料は未見だが、今後の調査の課題としたい。

※ 引用箇所については、漢字は常用漢字にあらためたが、仮名遣いや漢数字などの表記は基本的に原文のままにした。

## 注

- 1 広島県立文書館蔵
- 2 二〇一八年九月八日〜十一月二五日に広島市現代美術館で開催された「丸木位里・俊―《原爆の図》をよむ―展」展図録所収の寺口淳治『《原爆の図》再制作版についての覚書』においても、「福岡の地方紙である西日本新聞の本社版のほか、筑豊、京築、筑後、北九州の各版、および柳河新報や朝日新聞の西部本社版、筑後版の10月分には記事がなかった」と報告されている。
- 3 白戸仁康「GHQ占領下の「原爆の図」北海道巡回展 一九五一年一月二八日―一九五二年五月一日」、『文化資源としての《炭鉱》展 「夜的美術館大学」講義録、二〇一二年
- 4 「総合原爆展」をはじめとする三菱美唄炭鉱労働組合文化サークルの活動については、当時文化部長を務めていた故・本間務氏の保管していた膨大な資料が詳しい。
- 5 「野々下徹メモ」より。野々下徹は丸木夫妻のもとに寄宿していた若者で、後に美術批評家となるヨシダ・ヨシエとともに当時《原爆の図》を背負って各地を巡回していた。
- 6 『朝日ジャーナル』（一九六八年八月一日号）
- 7 『北鹿新聞』（一九五五年四月三〇日）